

## 同時代の「京都支那学者」から見た内藤湖南：『支那学』第七卷第三号「内藤湖南先生追悼録」を中心に

その他のタイトル	Naito Konan in the Eyes of His Fellow Sinologists in Kyoto : An Analysis of the July 1934 Issue of Shinagaku in Memory of Naito 's Passing
著者	劉 岳兵, 殷 晨曦
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian cultural interaction studies
巻	15
ページ	565-576
発行年	2022-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.32286/00026605">http://doi.org/10.32286/00026605</a>

# 同時代の「京都支那学者」から見た内藤湖南

——『支那学』第七卷第三号「内藤湖南先生追悼録」を中心に

劉岳兵\*・殷晨曦\*\*

Naitō Konan in the Eyes of His Fellow Sinologists in Kyoto: An Analysis of the July 1934 Issue of *Shinagaku* in Memory of Naitō's Passing

LIU Yuebing, YIN Chenxi

Naitō Konan (1866-1934) was one of the leaders of the Kyoto School of Sinology in the early 20<sup>th</sup> century. As Naitō increasingly became a focus of research in recent decades, there appeared some exaggeration about his image and scholarship. Therefore, taking a look at how he was viewed by his fellow Sinologists in Kyoto immediately after his passing in June 1934, will undoubtedly help us to get a better understanding of Naitō. From the seventeen articles included in the July 1934 Issue of *Shinagaku* 『支那学』, one may get impressions about Naitō's personality and integrity, as well as his accomplishments as a book collector, an opinion leader, and a university professor.

Key words: the Kyoto School of Sinology, Naitō Konan, the Naitō historiography

キーワード：京都支那学 内藤湖南 内藤史学

内藤湖南（1866-1934）は「京都支那学」の創始者の一人である。内藤湖南に対する中日両国の研究が進むにつれ、内藤湖南の様々な側面が拡大され、すこぶる「横看成嶺側成峯」（視線を横に動かせば山脈となり、側から見ればそそり立つ）の勢いがある。もし当時の「京都の支那学者」たちの目に映った内藤像を探してみると、これらの内藤像は私たちが内藤湖南をよりよく理解するための参考になるかもしれない。内藤湖南が1934年6月26日に亡くなり、その翌月に発行された『支那学』（京都大学「支那学

---

\* 著者 中国社会科学院哲学博士、関西大学博士（文化交渉学）。南開大学日本研究院院長、南開大学世界近現代史研究センター教授。

\*\* 訳者 南開大学大学院博士後期課程学生、日本思想史専攻。

中国語の原文は南開大学世界近現代史研究センター編『世界近現代史研究』第11集（北京：社会科学文献出版社、2014年）に掲載され、のちに劉岳兵著『近代中日思想文化交渉史研究』（南京：江蘇人民出版社、2019年）に所収。

会」機関誌)第7巻第3号に附録されている『内藤湖南先生追悼録』(以下『追悼録』と略称し、引用文部分に著者名とページ番号のみを注記する)は、私たちに良い材料を提供してくれた<sup>1)</sup>。

## 一、『内藤湖南先生追悼録』所収文章と同時代「京都支那学者」の見た内藤湖南の全体像

『追悼録』は1934年4月9日の内藤湖南の遺影、その『病中読爾雅』の筆跡、序文、『内藤湖南先生略歴』、『内藤湖南先生著述目録』と十七編の追悼文から構成されている。十七編の追悼文は順序ごとに並べると以下の通りである。

- 狩野 直喜：『内藤君を偲んで』  
岡崎 文夫：『内藤先生の思ひ出』  
青木 正児：『湖南先生逸事』  
丹羽 正義：『先生を懐ふ』  
松浦嘉三郎：『志を抱いて逝かせらる』  
石浜純太郎：『僕の憂鬱』  
新城 新蔵：『欽若昊天 内藤博士の思ひ出』  
那波 利貞：『内藤先生を憶ひ奉る』  
倉石武四郎：『雪屐尋碑録の跋に代へて』  
鈴木 虎雄：『内藤博士の近作』  
小川 琢治：『内藤湖南先生の追憶』  
本田 成之：『湖南先生と余』  
武内 義雄：『湖南先生の追憶』  
神田喜一郎：『内藤先生を憶ふ』  
羽田 亨：『史料蒐集家としての内藤博士』  
小島 祐馬：『湖南先生の「燕山楚水」』  
梅原 末治：『内藤先生を憶ふ』

十七編の追悼文の作者の中で、十一人の文章が江上波夫編の二冊の『東洋学の系譜』に収められている<sup>2)</sup>。その全てが日本の近現代中国学研究の重鎮である。このうち、狩野直喜は内藤湖南とともに京都

1) 統計によると、内藤湖南没後まもなく、『支那学』のほかに、『旭水会志』、『書芸』、『懐徳』、『歴史と地理』など7つの雑誌が追悼特集号や追悼録を出版した。砺波護「内藤湖南」、砺波護・藤井讓治編『京大東洋学の百年』、京都大学学術出版会、2002年、第63頁。

2) 以上の作者の中で、江上波夫編『東洋学の系譜』(大修館書店1992年)には狩野直喜(1868-1947)、新城新蔵(1873-938)、鈴木虎雄(1878-1963)、羽田亨(1882-1955)、武内義雄(1886-1966)、青木正児(1887-1964)が収められている。その『東洋学の系譜[第2集]』(大修館書店1994年)には小島祐馬(1881-1966)、石浜純太郎(1888-1968)、梅原末治(1893-1983)、倉石武四郎(1897-1975)、神田喜一郎(1899-1984)が収められている。他の六人の岡崎文

「支那学」を創始した学者で、他はその門下の知友である。同時代の「京都支那学者」から見た内藤湖南の全体像がどう映っていたか、『追悼録・序』の一節から分かる。

「昭和九年六月二十日六内藤湖南先生卒す。我等同人哀痛何ぞ堪へん。先生絶倫の資を以て篤學好古、六藝を并包し、百家を貫申し、特に乙部の書に於いて用力最も邃し。學問の淵博、識見の高邁、蓋し前古匹儔稀なり。嘗て事に操觚の業に従ひ、筆を東都浪華に揮ふ。議論時流を壓し、文章山斗を仰ぐ。後、職を京都大學に奉じ、講席を主ること十有七年。所説示唆に富み、史眼班馬に遜らず。平生人に接する寛和、曾て人の短を言はず。尤も意を後進の誘掖に用ひ、耳提面命、諄諄として倦まず。是を以て諸生其の徳を慕ひ、皆以て恩殊に己に厚しと爲す。」(p.1)

学問にかけては、その歴史学（「特に乙部の書に於いて用力最も邃し」、「史眼班馬に遜らず」）に特に敬服している。松浦嘉三郎はその文章で「内藤学」の概念を提唱し、「支那上古史」と「支那史学史」は「内藤学の中核をなすものであった」と指摘された。(p.50-51)「内藤史学」は固有名詞として、いつ、誰から提起されたか分からない。私の寡聞からみれば、1956年に京都大学文学部が出版した『京都大学文学部五十年史』の中で、内藤湖南の学問を次のように評価している。「教授の學問は古代から現代にわたり、かつ史學史・繪畫史・考證學・思想史の各研究分野を新しく開拓し、またこれまでの王朝單位のいわば斷代史的研究を打破し、複雑な中國史を發展的に捉えようとしたが、その學風は内藤史學なる一體系を創造し、今日なお不滅の輝きを放なつている。」<sup>3)</sup>内藤史学を独特な学問体系として評価し、その学術史上の地位を十分に肯定していることが『追悼録』において確認できる。

## 二、「京都支那学者」たちから見た内藤湖南の諸相

### 1、狩野直喜から見た内藤湖南

『追悼録』に狩野直喜さんの記念の文から見れば、まず、狩野は内藤を尊敬に値する知己として見てきた。

「京都の文科大學は卅九年に成立した。その少し前に君は『朝日』の社説で確か『樸學論』<sup>4)</sup>とかいふ標題の下に學問の研究は科學的な、實事求是でなければならない、京都に文科大學が出来るならばその

---

夫（1888-1950）、丹羽正義（?-?）、松浦嘉三郎（1896-1945）、那波利貞（1890-1970）、小川琢治（1870-1941）、本田成之（1882-1945）も立候補者だが、上記の著作の中に入れていない。

3) 京都大学文学部：『京都大学文学部五十年史』、1956年、第159頁。

4) 1901年に内藤湖南が『大阪朝日新聞』に『京都大学と樸學の士』（8月14、15日、『内藤湖南全集』第3巻、第271-275頁）という文章を発表された。彼は新しい時代に、樸學の士を養成するのは京都大学最大の天職と為す。「而して當さに開かるべき文科大學に於て、其の教授が最も其の樸學研鑽の風を保持し、考證煩瑣の弊を擺脫して、文明の批評、社會の改造より見を起し、古來關西學者に特有せる、寧ろ固なるも雜ならず、寧ろ峻なるも泛ならざる學風を興さば、三十年間東京大學に缺乏して、世人に厭厭せしめざりし新思想の特據、或は此間より出でんも、未だ知るべからず。」さらに彼は「京都大學學風の傾嚮」を「吾邦学者品味の問題と小ならざる關係を有す」の高さにまで高めた。

學問の研究はこの方針を以て進まれんことを望むと、いふ意味のことを力説せられたので私は知己の言として非常に敬服したものであつた。」(p.30)

また、狩野は学問を評価する際に、内藤を宋の王応麟の如き人物とし、その学問を十分に認められている。

「非常に博覧強記な透徹明敏な人であつた。専門の史學のみならず經學でも詞章でも畫書の鑒識でも又自らも能筆であつたことは誰しも知る所で、支那で云へば宋の王伯厚<sup>5)</sup>の如き人であると云へる。併しその學問も單に物事を知つて居るといふのではない。そこに一貫した主張があつた。決して雜學者ではなかつた。種々な知識はすべて専門の史學の爲になるやう活用されて居つた、君は晩年支那の史學史を講じて居られたと聞くが此れなどは昔流の所謂漢學者の如く史類の書丈を読んで、それを基礎として支那史をやる人には出来ぬ藝である。君の如き博大な學問の人にして初めて出来ること、思ふ。斯る點になると他人の追隨を許さぬ處であり又容易く他人の真似るべき所ではない。」(p.31)

狩野は内藤湖南が学問を成就する道について、内藤は正統な官学の出身ではないが、新聞記者の特殊な経歴があるこそ、「博大な学問」を成し遂げられ、彩りを添えられたと考えている。これは一般人が真似たとて到底出来るものではないとし、

「嘗て君は私に語って「自分は若い時分から新聞記者をした普通の官學のコースをとらなかつた。その爲め無駄な餘計な本を読んだ、それが今となつて見ると何かの役に立つて居るやうに思はれる」と云つたことがある。普通の學歴のものは學生の時分から餘計な本を読む機会もなく早く専門家となるから益々餘計な本を読む暇がない。内藤君は永らく新聞界に居つたから早く職業的専門家にならず、餘計な本を読まらぬ、餘裕があつた。それで餘計な本を読み八面に知識を停蓄して、大寧へ入らるるに及びそれを君の史學の上に活用された。勿論その活用といふことは内藤君の如き人にして初めて出来たことであらう。内藤君の如き人にして私達の如きコースをとつてもやはり偉い學者となつたらうと思ふが、又一面から考へると斯る不規則なコースを経たといふことが一段と君の偉らさを増す機會を與へたやうにも思ふ。これは内藤君にして初めて出来る處で常人が真似たとて到底出来るものではない」(談話筆記)

狩野直喜は内藤湖南と「京都支那学」を立ち上げた。彼らの学問の共通点、類似点、例えば文、史、哲を貫徹し、考証を重視して事実求是を強調した。中国の伝統文化に対して深い同情を寄せるなどの面

5) 王伯厚(1223-1296)。王応麟、字は伯厚、号は深寧居士。學術上、「私淑東萊」と言われる。(呂祖謙を敬慕し、その学問を継承する)(『宋元学案』卷18)朱熹、陸九淵の学問を習い、他にも永嘉の学問をも継承した。天文地理から經史百家にかけ、すべて研究の考証を行い、清朝考証学の先驅とされた。著書は『困学紀聞』、『玉海』、『論語孟子考異』、『漢制考』、『六經天文編』、『通鑑地理通釈』、『深寧集』など三十種類以上がある。—『中国歴史大辞典』「王応麟」項による。

で、すでに後進の学者達に論破されたが<sup>6)</sup>、その人柄と学問研究のそれぞれの特色について、さらに研究する必要がある。

## 2、生活の中の内藤湖南

「追悼録」の作者は全員内藤湖南と親密な知友或いは門下生であるため、彼らが見ている内藤湖南の各側面、特に日常生活と関連している細節について、私達に対して改めてこのような歴史上の人物を認識し、多くの生き生きとした感性的素材をつけ加えられると思う。

例えば、体形の特徴から見て、学生の目には「短軀肥満」、「疏髯」、俯きがちに歩く。（岡崎文夫、p.33）。勤務・休憩時間については、「内藤湖南はいつも徹宵讀書せられ、曉鷄鳴を聞いて寝に就くを常とし」、「有名なる朝寝坊である」。「大學の講義は皆十時以後の時間割なり、その十時にさへ遅刻は珍しからずとなん」。「先生の奇癖は風呂の永きことにて、摩るでも無し、只ちやぶちやぶして居るゝと云ふ」（青木正児、p.39）。

教師として、学生との交流は日常生活の重要な一環である。内藤湖南も同じである。その名声と身分のため、日常には様々な訪問客が絶えずことは容易に分かる。「毎週一日丈けは（金曜日）一切他の客を斷り學生の日とする」。毎週その晩になると、話は具体的な質問に応じる答えから、様々な書籍の解説、さらには歴史観、人生観まで、「十二時になつても會合は散じなかつた」（松浦嘉三郎、p.46）。普段でも、学生と交流する時には、「それまでぞつと俟つて居た御客に濟まない感を抱いた」、「又余等粗服して先生の席に侍せる際に鮮美の衣裳を身に纏ふ客の來ることあり、余等其席を譲らんとしても先生は遂に許されぬこと多かつた」。学生に「蓋し商人よりも學士を愛せらるゝ先生」と感嘆させた（岡崎文夫、p.35）。学生に「蓋し商人よりも學士を愛せらるゝ先生」と感嘆させた（岡崎文夫、p.35）。内藤湖南は晩年、仏教学に興味を持った。それは富永仲基の『出定後語』から学問上の啓発を受けたと考えられている。「先生は晩年に佛學に興味を持たれ神會大師の著書が発見せられると特に其れを余に「讀め」と勧められた。觀無量壽經に就いて一大創見を持つて居られたが發表を見ずに終つた。」（本田成之、p.72）。晩年の仏教に対する興味は、学問上の関心なのか、それとも信仰上の関心なのか、更に研究する必要がある。

内藤湖南は書画に一見識をもつだけでなく、自ら「中国絵画史」を著し、自身の書道への造詣もかなり深い。彼は流行っている北碑より、王羲之などの南書のほうが好きで、その書画鑑賞のレベルもとても優れている<sup>7)</sup>。これらは彼にとって一つの文人の教養である。富岡鉄齋と狩野直喜はいずれも本田成之に「書技を以て世に立つこと」と勧めたが、職業的の書家や畫工をあがめていないため、内藤湖南は「學校をやめたら不可」と言った（本田成之、p.72）。

日常の中で人と接する態度について、前文では内藤湖南の「平生は人を寛大謙虚に接し、人の短所を

6) 小島祐馬：『開設当時の支那学の教授たち』を参照。京都大学文学部「京都大學文學部五十年史」、1956年、第435-437頁。

7) 陶徳民編著『内藤湖南と清人書画—関西大学図書館内藤文庫所蔵品集—』を参照。関西大学出版部、2009年。陶徳民編『大正癸丑蘭亭会への懷古と継承—関西大学図書館内藤文庫所蔵品を中心に—』関西大学出版部、2013年。

言ったことがない」ということに言及した。「他人の微瑕を氣を懸けるやうな狭量な了見を抱かれずが何人でもその長所を認めてそれを扶翼してやる」、「清濁併せ呑む」とまで書かれている。松浦嘉三郎によると、内藤湖南が人を罵倒する時の最も強い言葉は「あれは途方もない愚物だ」。しかし、「愚物と曰われる人は鈍物といふのでなく、身の程知らぬ自惚れの強き者」を指す（松浦嘉三郎、p.47-48）。

### 3、書痴

内藤湖南の恭仁山荘には今も林則徐の「拓室因添善本書」という扁額が掲げられている。かつて恭仁山荘に所蔵されていた善本は、杏雨書屋が編纂した『新修恭仁山荘善本書影』（武田科学振興財団1985年発行）から分かる。

内藤湖南と本（古籍）の物語は、『追悼録』に繰り返し出てくる話題である。羽田亨が特に「史料収集家としての内藤湖南」という文章を書いているほか、那波利貞、小川琢治、武内義雄、青木正児、神田喜一郎、倉石武四郎など語った話はすべて書籍、史料と関係がある。

内藤湖南の学生である那波利貞は那波活所（1595-1648、江戸前初期儒者）の10代目の子孫で、内藤と直接知り合ったのは1909年8月中旬である。当時、「徳島市に於て加藤清正公の三百年祭が舉行せられ、市内有数の寺院なる本行寺で記念講演會が開催せられ、當時京都帝國大學文科大学講師であられたる先生には、其の講演の爲に來市せられたのであつた」。内藤は那波一族が「活所以來襲藏する若干の漢籍の存することをも承知せられ居りて一應閲覽せられる御希望がある。」その年、那波利貞は19歳である。後ほど、内藤の講席に侍して東洋史を専攻し、確かにその因縁が浅からず（那波利貞、p.58-60）。神田喜一郎は内藤に初めて拜晤したのは、祖父の神田香岩（1853-1918）が架蔵の唐鈔本『翰林學士集』を借りに来た時である（神田喜一郎、p.78-79）。小川琢治は、内藤が來訪に際して燈下で宋人の『輞川図』の模本（王維は晩年に輞川に住んでいた時に描いた絵）を展べて読んでいる面白い様子を述べている。

「夜九時頃から十一時まで觀賞され」、「皇姊圖書」の蔵書印から所蔵の経緯を研究する。「暗黒に塗りつぶした如き岩石の描法から宋代皴法發達以前の古法の遺存まで」、まだ意を尽くしていないから、借覽して持ち帰られた。（小川琢治、p.70）

内藤湖南は本を以て友達を作り、あらゆる本のあるところを訪ね、知友と門下生が彼を訪ねてきた時、近獲図書を共有することを楽しみとし、その価値を一つ一つ説明する。これは学生にとって、古籍に関する知識を育成するだけでなく、文献の選別も歴史研究という分野に必要とされる仕事（武内義雄、p.75）。

平常、書齋の中、また講壇の上に、落ち着き払って身なりを構わない、しょんぼりしているように見える。「コハゼをかけることを面倒がつて、突ツかけ足袋とでもいふべき姿で室内に起坐せられた」、「併し一旦、史料の採集といふやうなことになる、この無精は忽ち一變し」、骨身を惜しまず、一心にやっている。羽田亨が文章の初めの部分は、1912年4月初めに奉天で『満文老档』、『五体清文鑑』の撮影に

協力することを特に述べた。その中の細部は内藤自身が述べた事件の不足を補うことができる<sup>8)</sup>。羽田が風邪に冒されて授業を休まなければならぬ時、内藤は自分で暗室の中にフィルムを現像する仕事を引き継ぎ、腰の痛みに堪えている。一日四五百枚にも余る写真を現像するような日が二旬の日以上続いている。当時天地が凍らばかりの寒さで、その労働の強さと苦勞が分かる。仕事が終わった時、陸軍の高官が「こんな事は誰かにやらせて、宿舎に休んで居られたらよいだらう、學者の自らする仕事ではないやうだ」と言った。内藤湖南はなぜ自らこのようにするのか、羽田はこれらのことを身をもって経験して初めてその重要性を実感した。彼は以下の点について話した。

「第一にはこれを撮影するを許されるに至つた事情を顧慮せられ、慎重なる處置に出られたに違ない。次には萬一脱漏等のあつた場合、これを補ふことが殆んど不可能であると考へられたにも由るであらう。またかくして一枚一枚と自からはぐつて、鮮やかにその記憶を残して、寫真では得ることの出来ない原本の印像を留めて置かうとも考へられたであらう。更にまた甚だ實際的な説明を附加して置かなければならぬのは、當時かゝる事業に支出せられた金額は實に僅少であつて、今日の状態=勿論尚ほ不自由を訴へられるにしても=とは比較にならぬ」（羽田亨、p.84）。

貴重な史料に対して、内藤湖南はなんとかして一次資料と接触しなければならないと考えた。『満文老檔』や『五体清文鑑』のような無償の宝は、原本が探し出せなくなったら、必ず苦勞を厭わないでコピーして手に入れる。この精神は深く感心させられる。価値のある図書に対して、内藤の態度は小島祐馬が言ったように、「湖南書を購ふ價を論ぜず、苟も一見意に介する底のものあれば、囊を傾くるも購はずんば己まず」（小島祐馬、p.89）。

本を買うことに関し、青木正兒の『湖南先生逸話』にはこのようなエピソードが書き記されている。1914、15年の頃「湖南先生、宋本史記を購はれ、一時評判なりしが、其顛末に關し彙文堂の余に語りけるは、同書は初めさる骨董を商ひける者十歳圓とやらにて買ひ來り、神田香巖翁の許へ三四十圓ぐらひにて質に入れありしが、其後翁の買ひ取らんと云ふを聽かずして受出し、東京に持ち行き龜田某（其名を忘る、鵬齋の子なりと云ふ）に百圓にて賣りたり。後十数年を経て六百圓にて文求堂の手に歸し、千五百圓と價を付けて目録に出せり。然るに北京なる董康氏より買ひ方を彙文堂に託し來り、既に賣り渡さんとせし折柄、偶ま湖南先生の彙文堂に來られければ其由を語りしに、「されは大變なり、彼の書を支那人の手に渡さんは如何にも口惜しき限りなり、暫し待て」とて、大阪なる〇〇〇氏に相談して遂に自ら購はれたり。但し此前先生が文求堂にて同書を一見せられし折、「先生ならば千圓に負け申すべし」と主人が言ひ居たりしとかにて、此時先生の手には其價にて入りしはずなりと云ふ。」これに対し、青木正兒は「余曩に先生が此書を求められたるを聞き、單に書物道楽の甚しきもののみ思ひ居たりしが、此事を聞くに及び深く其俠氣に感じぬ。此に至つて初て眞に書を愛する者と謂ふ得べく、寔に古人恥ぢざる美談なり。」（青木正兒、p.38-39）宋の『史記』はもちろん中国の本である。内藤湖南は中国の本

8) 内藤湖南などの著、錢婉約、宋炎輯訳『日本学人中国訪書記』（中華書局、2006年）を参照。錢婉約『内藤湖南奉天訪問及其學術意義』、『瀋陽故宮博物院院刊』（第六集、中華書局、2008年）に所収。



が中国人に買われてしまったことはもったいないと思い、毅然として手を出し、この本を買った。このことは当時の京都支那学者の目には「深く其俠氣に感じぬ」と見なされ、「美談」と伝えられていた。董康本人がこのことを知っていたら、どう思うだろうか。これが事実だとすれば、「董康と内藤湖南の書縁情宜」はおそらく「互いに信頼し、頼る」という「知者は知者をいとおしむ」一面だけではないだろう。また、内藤湖南はふざけて董康を「文化侵略大将」と呼んでいる。このように見ても、内藤は「董康の日本訪問のための書友」だけではないようだ<sup>9)</sup>。肝心な時に、董康が日本で書物を捜し求めることに反発し、その成功を阻止した急先鋒でもある。もしかしたら、その時代には、強い「経世意識」を持っている「志士」型の愛書家にとって、このような行為も非難の余地がない。当時の「俠氣」が今日から見ると「狭隘な気」になり、「美談」が「笑談」になったとすれば、これは歴史のなした冗談だけでなく、歴史の変遷を玩味させる好適な事例でもあるといえる。

#### 4、経世家

内藤湖南の強い経世意識と志士の情熱というイメージは、『追悼録』にも展示されている。松浦嘉三郎の次のような文章を読めば一目瞭然である。

「卅歳前後の時、領臺後單身赴臺して臺灣統治に就きて種々献策し、日露戦争には率先開戦論を倡導し、寺内内閣の時には、外交調査會の機密に參せられた先生は決して單なる冷やかな批評的な讀書人ではなかつた。先生の如き智識慾の旺盛な人は如何なる途をとられても結局は學者になられたらう、併し胸底には常に國家のことに就きては熱心に考へる志士的な情熱を有して居られた。それも眼前の政策のみに就いてではなく、東洋の將來とか民族の興亡とかいふ如何にも歴史家らしいサゼスチーブなことを考へて居られた。支那論とかいふ新支那論とかいふ、凡そ教室に於ける先生と恐ろしい縁遠い著述をなされた意圖も此の情熱の迸つた結果である。されば滿洲事變發生以後、人一倍滿洲の將來に就いても御心配して居られた。昨年十月主治醫始め全醫師の反對をも押切り、渡滿せられ日滿文化協會の成立に骨を折られたのも、最後の御奉公の一念の切なるものがあつた爲であり、御歸りになつてからも山莊に居りながら該會のことに就きては細大洩らさず差圖をして居られ滿洲國の問題に就きては、青年の如き感激さへ感じて居られた。」(松浦嘉三郎、p.51)

学生はよく時事問題や経世論で内藤の意見を窺った。内藤は事情の解剖や経世論の展開によって、学生に時事問題に対する彼らの興味を認識させ、「矢張支那の人文生活を充分に極めて之と關聯して時事を解するに非ざれば意味がない」と言った(岡崎文夫、p.35-36)。この点も意義があるはずである。しかし、このような志士の豪情が軍国主義者の御用に甘受すれば、歴史家としての良識は時代の煙幕に惑わされやすい。この点については中国の学者はすでに多くの論述をしている<sup>10)</sup>。

9) 錢婉約『董康と内藤湖南の書縁情宜』(『中華讀書報』、2012年4月18日に所収)。

10) 楊棟梁：『民国初期内藤湖南の「支那論」弁析』、『南開學報』2012年第1期。實際、1960年に宮崎市定が師の内藤湖南について言及した時には、「現実の政治に最後まで興味をもたれたことも、恐らく利害相半ばしたことであろう」

## 5、大学の教授

大学の教授として関連分野で基礎を築き、有志と国際的な影響力を持つ学派を創始できるならばこれは非常に成功し、羨ましがられるケースだと言える。この意味で、内藤湖南はとても優秀な大学教授と思っている。

教授の本務は教室で授業することである。内藤湖南は正統な官学出身ではないが、京都帝国大学が慣例を破り、新聞記者の内藤を大学に採用したのである。この新しい職場に適應するために、内藤湖南は非常に勉強と探求を心がけていた。西田直二郎<sup>11)</sup>によると、内藤は1907年に京都大学に入ったばかり、『清朝建国史』を講義し始めたとき、授業で分かりにくい満洲語をたくさん使っていたので、学生たちの間で議論された。西田は次のように書き記している<sup>12)</sup>。

「ある時國史を専攻する M という學生が冗談交りに「先生の講義を聴いておりますと、五里霧中（この語を使うたのである）の感がいたします」というたことがある。—これは講義がわかりにくいという意味であるよりは、すべてが耳新しく何か神韻の漂渺たるもののあることを、そのころよく五里霧中とシャレて云うたのである。内藤先生はそれでもこの言葉を氣にせられたか、後に「それではどの教授が講義上手であるか」と聞いていられた。その後間もない頃、哲学科の大教室で谷本富教授の「教育學及教授法」の講義がある時、突然内藤先生が戸を開いて入り來られ、教室の中で焚いているストーブのところ椅子を寄せて教育學の講義を聴かれたのであつた。谷本教授はそのころ雄辯天下—を以て自ら任じ、その教育學の講義そのものがそのままに教授法を具現している、と自ら稱していた。内藤教授は、即ちそれを觀に來られたのであつた。教壇上の谷本教授はいよいよ得意となり、聲を一層大にしてそのままに教授法の範を示す教育學が講じられていつたのであつた。講義の間、ときどき高い教壇から下をのぞみ見て言葉を夾んで「どうだ、内藤君！谷本の講義はうまいものだろう！」と云つた。内藤教授はストーブに手をかざしながらあの童顔をほころばせて、教壇を見上げつつニコニコとしておられたこと—今も眼の前に浮び來るように思われる。」<sup>13)</sup>

谷本教授の講義はもちろん素晴らしいであるが、谷本教授の授業で内藤教授の単純な笑顔は、学生に

---

と指摘していた。特にこの点は「先生（内藤）ほどの才識をもたぬ我々の、とくと反省せねばならぬ」と強調した。（『京大学園新聞』1960年5月9日「師」欄、『宮崎市定全集』第24巻、岩波書店、1994年、第233頁）。「政治に深入りしすぎたこと」を明確に批判することは内藤学問の限界の一つである。（同上『宮崎市定全集』第24巻、第248頁。）

11) 西田直二郎（1886-1964）：文化史家。1910年に京帝国大学文科大学国史学科を卒業し、1919年に同校の助教授を務め、1924-1946年に教授を務めた。主な著作は『日本文化史序説』（1932年）、『京史跡の研究』（1961年）、『日本文化史論考』（1963年）などです。

12) 谷本富（1867-1946）：日本近代の教育者。東京帝国大学教育学教授法講座教授を務めた。明治二十年代にヘルバルト派の教育説の紹介した。『科学的教育學講義』、『实用教育学及教授法』はその成果であった。後ほど新教育を唱導し、即ち個別的教育を主張し、かつ道德教育、宗教教育を重視したのであった。1913年京大の「沢柳事件」に坐して退官するまで、在任九か年、その間の主な研究の成果は『大学講義全集』。京大文学部：『京都大學文學部五十年史』を参照。1956年、第268-269頁。

13) 西田直二郎：『史学科創設のころの歴史学を思う』、京大文学部：『京都大学文学部五十年史』、1956年、第462-463頁。

とって、より知恵を啓発し、うれしい気がし、心を豊かにしている滋養になるのではないのでしょうか。元気な人間性の輝きが内藤の顔に輝いていて、生徒の心にも映っている。

丹羽正義が言ったように、「類稀な海内の碩學としてよりも、菲才で淺學な私にとつては、先生は人としての先生でありました。本の読み方、ものゝ考へ方に、人生といふの、世界といふものを教へて下さいました。(中略) 司馬遷、杜佑、章學誠については幾度か御話を承りました。其人の亡するとともに絶學となつたこれ等の人の學が脈々として先生の中に生き、その黯滴が時に口うつしにされることを夢心地に覺えました。それこそ一滴半滴であつたでせうが、それが私には生命の糧でありました。」(丹羽正義、p.42) 大学の教授とし、その学問と人間性、品性は、後学をぐくむことにおいては、確かにその師徳が称賛に値する。

教室の中で、内藤の風貌はどうであったか。非常に厳格でありながら、順序を追って人を上手に教え導き、朴訥で飾り気がなく、示唆に富むとまとめることができる。松浦嘉三郎は回想として、

「教室に於ける先生は實にユニックな存在であつた。恐らく講義を聞いた何人も多大の感銘を印して居ると思ふ。大概和服で紋付といふ扮装であらせられたが、平常の温顔に似ず教室では實に謹嚴そのものであつた。脱線をしたり、氣焰を上げたりせられることは一度もなかつた。ノートをお読みになるこいふやうなことはなく、ふだん談話をせられると同じ調子であつた。私達の學生の時には古代史を講じて居られたが後には史學史をも特殊講義の時にせられた。布呂敷に一抱へもある参考書籍を、一々披いて机の上に並べられ極めて緩漫な語調で順序よく語り時の過ぐるを關はず晝食を一時頃に喰はねばならぬことは屢々であつた。聽講者の中には新城博士や大學院の人もあつた。談佳境に入ると今迄腰懸けて居られた椅子から立ち上り、参考書籍を離れて横を向き静かに想を練りつゝ、あの巨大なる頭腦から山泉の水が滾々として盡きないが如く順序よく極めて平易に語られた。」(松浦嘉三郎、p.46-47)

武内義雄は次のように記している。

「先生の講義は章節を分ちて麗々しく護讀みあげられる様なものではなく、いつも澤山な書物を教壇に持つて來られて、それを披きながボツリボツリと話される地味な講義ではあつたが、該博な學問と深遠な見識とは躍如としてゐるで、非常に緻密な考證があるかと思ふと、また見通しのきいた概觀があり、時にこれは未だ學界で充分研究されてはゐないが斯々の手段で研究すれば必ず面白い結果を得られるであらうといつた調子の暗示さへあたへられてゐた。授業門生の研究がこの種の暗示から出てゐるものも少なくない様に私は思つて居る。」(武内義雄、p.73-74)

もちろん教師とし、授業後で学生との交流も生活の中の重要な一環である。この面はすでに前に述べた。

### 三、内藤湖南理解のための『追悼録』の意義

『追悼録』の中にはすでに指摘されている。「後の湖南先生を研究する人は既刊の著書論文以外にも先生の偉大さを求めねばならぬと思ふ。」（松浦嘉三郎、p.52）「既刊の著書論文以外」とは、内藤湖南の生涯と学術的背景だけでなく、広範な交友関係と社会、学術活動も含まれている。『追悼録』は、内藤湖南をさらに理解するために、「既刊の著書論文以外」の豊富で生き生きとした回想録を提供してくれ、重要な史料価値を持っている。もちろん、すべての史料を選別し分析しなければならないように、これらの回想録も例外ではない。

大学教授として、「人師」としての内藤湖南の模範的意義は、『追悼録』において十分に示されていて、今日でも勉強する価値がある。『支那論』、『新支那論』など教室にいる先生とほとんど縁のない著述は、内藤湖南が「中国人の代わりに中国のために考えている」ことだけでなく、日本政府関係者に代わって将来を考えている結晶でもあり、すべては「国師」としての内藤湖南の経世意識の表れである。一世紀の歴史の変遷を経て、その時代の意義も次第に明らかになった。内藤湖南は武内義雄に「思想には発展があるものだと見てゐる点にある。文献の不足勝な古代の文化を考へるには是非とも思想の発展に對する一つの規範を見出さなければならぬ、加上の法則は即ちその規範である。」と言った。「考證學をやるにも朱子の語類だけは讀む必要がある、朱子は未だ充分な考證をやり得なかつたが古書を取扱ふに當つて書物によまれずに紙背に徹する眼光を持つてゐた。考證家がこの點をうまく利用すれば確かに前人を凌駕することができる」と強調した。（武内義雄、p.77）。歴史学者として、学問の方法と実践の中で、史料、考證の重要性を重視しながら、その制限性にも注目し、紙背に徹する眼光で「考証以上に更に大きなものがある」ということを発見し、つまり歴史発展の「規範」を見つけようとするのである。これは「内藤史学」の貴重な精神遺産だけではなく、広範な参考的意義を持つ学問の道でもある。

当時、燕京大学歴史学部の本科生だった周一良は、1934年7月号『支那学』に掲載された『追悼録』を読んでから、すぐに『日本内藤湖南先生は中国史学における貢献—「研幾小録」及び「読史叢録」提要』という文章を書いた。それは9月に出版した燕京大学歴史学会編『史学年報』の第2巻第1号に掲載された。十年前、王国維は内藤湖南にあてた手紙の中で、「先生の著作は多く貴国の文字で書いている。重要な作品を漢文に訳してから編集するのは私が特に望んでいることである。」<sup>14)</sup>周一良は比較的で全面的に中国学界に内藤湖南の中国史に対する研究成果を紹介する第一人者である。『研幾小録』と『読史叢録』の関連文を「中国古代史」、「清初史地」、「その他の時代」、「史料の紹介」の四つの方面に分け、重要な部分を選んで紹介し、『追悼録』に載せられている「内藤湖南先生の著述目録」を「編尾に添付し、稽考、探究に供する。」<sup>15)</sup>内藤湖南の時事論と史学研究を分け、「初期の著述は中国の時事を論ずることに偏り、宣伝的な性質に富んでいる。『清朝衰亡論』、『支那論』、『新支那論』の諸書のように、針砭適

14) 王国維『内藤虎次郎へ一九二四年一月三十日』、謝維揚、房鑫亮編：『王国維全集』第十五卷、浙江教育出版社、2010年、第88頁。

15) 周一良：『日本内藤湖南先生の中国史学における貢献—『研幾小録』及び『読史叢録』要約』（燕京大学歴史学会編『史学年報』第2巻第1号、1934年9月）、『周一良集』第4巻、遼寧教育出版社、1998年、第470頁。

切なところがないわけではないが、その意図を追究すると、日本人に常識を以て、中国にきた基礎とするように教え導き、まったく学術と言うに足りない。その中国史学に対する学術研究では、内藤湖南が「中国上古史と清初史地に最も力を致している」とし、上古史については「積極的な結論はまれであるが、古史を研究する態度は至極綿密で合理的であり、わが国の近年の学風と合致するところがある」と述べた<sup>16)</sup>。「その清初史地に関心を寄せている理由を追究すれば、日本人が経営している東三省政策の一面に他ならない」。内藤は杜祐（735-812、字は君卿）に感服し、天皇に『通典』の章節を説明したことがある。周一良は内藤湖南の「意図」を揶揄しながら意味深長に感嘆し「我が東北史地を検討し、全力投球する者は、君卿が『通典』を書いたように、諸人事に対する考察を通じ、有益な指導を与え、政治を行い、経世致用の目的を持っている。」<sup>17)</sup>周一良は内藤史学を批評し紹介する時に表現されたこのような度量と包容力はもちろん、その学問教養と自信によるものである。このような教養と自信の育成は彼の家學淵源のほか、周囲の鄧之誠、洪業、顧頡剛、錢穆などの有名な先生と「風義平生師友間」という譚其驥などの友人による薫陶の結果でもある。

内藤湖南が亡くなって80年が経った。中国では内藤の著作に対する翻訳と研究が進められているにつれ、現在の世風学風に鑑み、内藤本人に対する理解の一面化を避けるために、私はこの『追悼録』と周一良先生の当時の評論を読み返し、感慨に堪えない。

---

16) 同上。『周一良集』第4巻、第476頁。また、「諸篇の結論は、今から見て、まだ議論の余地がある。先生の学問を修める道と態度は、永遠に私どもの模範である。」同上、第470頁。

17) 同上。『周一良集』第4巻、第468頁。